

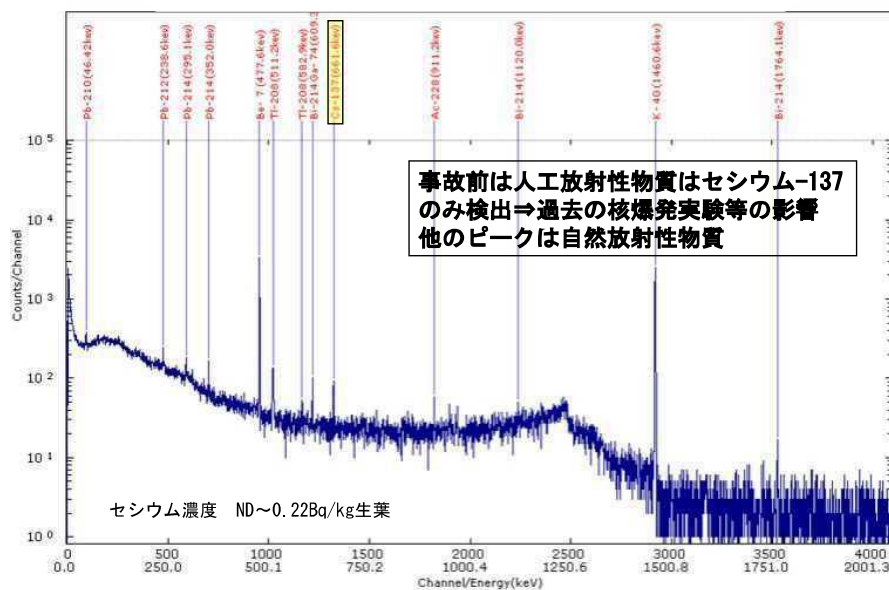
東電事故等の影響①

東電事故前でも、人工放射性核種であるセシウム 137 (^{137}Cs) が検出されていた。これは、過去に行われた大気圏内の核爆発実験などの影響によるものである。

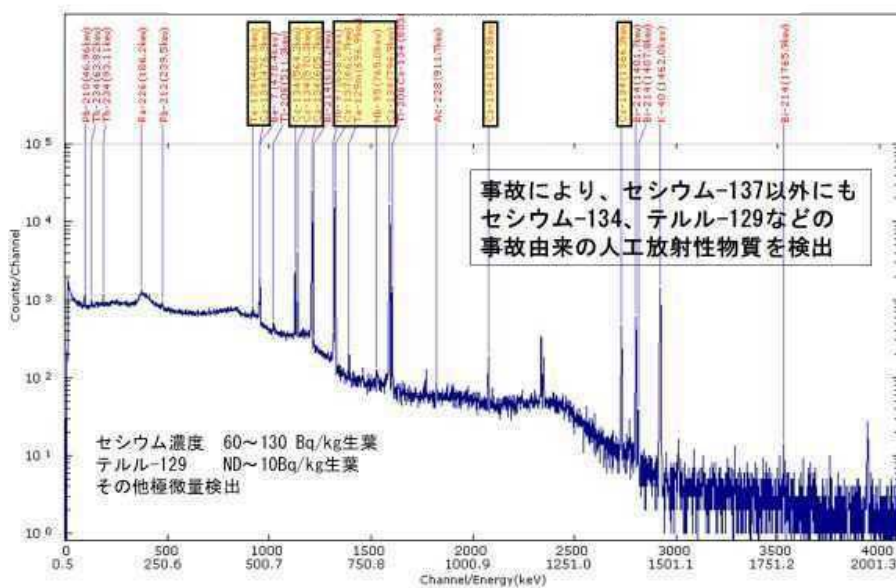
東電事故直後はセシウム 137 以外にも多くの人工放射性核種が検出されたが、1 年後には短半減期の核種は「検出されず」となり、セシウム 134 (^{134}Cs 半減期約 2 年) とセシウム 137 (半減期約 30 年) のみとなった。

ゲルマニウム半導体検出器による測定結果

① 東電事故前の松葉（平成 22 年 12 月）



② 東電事故直後の松葉（平成 23 年 6 月）



東電事故等の影響③

図は県内で採取された茶葉中の放射性セシウム（セシウム 134 とセシウム 137 の和）の推移である。

1940年代から1980年まで行われた大気圏内の核爆発実験と1986年に起きたチェルノブイリでの事故による影響を受け、その後漸減傾向を示していたところに、東電事故が発生し再び増加した。

現在、セシウム 134 は「検出されず」となり、セシウム 137 も事故直後と比べ、数百分の1以下に減少している。検出はされているが、漸減傾向にある中でのものであり、特異的なものではない。

茶葉中の放射性セシウム濃度の推移

